これからの日本を取り巻く食糧事情

丸紅経済研究所 所長
柴田　明夫

概要

世界の食糧需給がひっ迫している。旺盛な需要に供給が追いつかず、世界在庫が取り崩されているためである。原油価格の高騰を背景とした世界的なバイオマス燃料ブームは、今後、世界の食糧市場で、１）食糧をめぐる国家間の争奪戦、２）食糧市場とエネルギー市場の争奪戦、３）水と土地をめぐる農業部門と工業部門との争奪戦が強まる公算が大きい。これらの問題に対し、日本農業は、自給率の向上、水と耕地を含めた資源の徹底活用、アジア共通農業の模索を同時並行で行う必要がある。

項目

１．世界の食糧市場をみる上での６つの視点

・１）均衡点の変化、２）世界食糧在庫の減少、３）中国のインパクト、４）特定作物に依存する世界の食料、５）急速に普及する遺伝子組換え作物、６）３つの争奪戦の始まり

２．高騰する穀物価格は「均衡点の変化」

・史上最高値を更新するシカゴ小麦価格が大豆、トウモロコシ価格にも波及。

３．主要穀物の需給動向（３つの作物による２つの椅子採りゲーム）

・１）世界的供給不足下にある小麦、２）エタノール向け需要拡大で中長期的に供給ひっ迫が必至なトウモロコシ、３）トウモロコシへの作付けシフトで 08 年の需給がひっ迫。

４．需給ひっ迫に追い討ちをかけるエタノールブーム

・原油高騰を前提とした米ブッシュ大統領の新エネルギー政策。「２０　in　１０」（今後 10 年間でガソリン消費を 20%削減）計画のインパクト。

５．1970 年代初めに酷似する世界の穀物需給

・1970 年代初めの食糧危機のレベルを下回る世界の穀物期末在庫率。旺盛な消費に生産が追いつかず、結果として世界在庫が取り崩される構図。短期的な解消が困難。

６．大衆消費社会を迎えた中国の食糧事情

・過去 30 年 10%弱の高度経済成長を続けてきた中国は、食料消費においても大衆消費社会に突入。食料消費パターンの変化が、世界の食糧市場にも

７．脆弱な国際穀物マーケットと新たなリスク

・国際穀物貿易の３つの特徴。１）薄いマーケット、２）輸出国が偏在、３）輸入国も偏在。しかも、人類の食料は特定作物に依存。遺伝子組換え作物をどう評価するか。新たなリスクとしての地球温暖化

８．食糧自給率が４０％を下回った日本の課題

・食糧の輸入は水の輸入（バーチャルウォーター）であり農地の輸入（バーチャルランド）でもある。問題の複雑系に対応する「食料・農業・農村基本法」。